

ユーザーから見た電子書籍—大学生の読書体験から—

目次	
第一章 問題関心	2
第一節 電子書籍の現状	2
第二節 電子書籍とアプリケーション	3
第二章 先行研究	6
第一節 紙の本の物質性	6
第二節 電子書籍の物質性	7
第三章 調査	8
第一節 調査概要	8
第二節 それぞれの電子書籍体験	9
第一項 電子書籍で活字は気に入らない Aさんの場合	9
第二項 電子コンテンツへの先入観 Bさんの場合	10
第三項 電子書籍は選択肢にない Cさんの場合	11
第四項 電子書籍では読書の達成感がない Dさんの場合	12
第五項 電子漫画と小説の差 Eさんの場合	13
第四章 分析	15
第一節 インタビューたちが語った電子書籍の利点	15
第二節 インタビューたちが語った紙の本の利点、電子書籍のデメリット	17
第五章 考察	22
参考文献	23

第一章 問題関心

第一節 電子書籍の現状

電子書籍は現在、さまざまな端末・アプリを通して読まれている。電子書籍が誕生したのは、1990年代のことだ。CD-ROMを使った「データディスクマン」(SONY)が発売されたのが1990年。1993年にはNECがフロッピーディスクを利用した「デジタルブックプレーヤー」が発売され、他にも複数の電子書籍リーダーが販売された。

しかし、それらはすべて2000年を迎える前に販売が終了、ほとんど普及することはない。ところが2010年、「電子書籍元年」とさかんに語られるようになった。2007年に米国でAmazonが「Kindle」を発売、さらにAppleの「iPad」が2010年に発売されたことで、なかには「電子書籍が普及すれば、紙の書籍は消え去るのではないか」という声も聞かれた。インプレス総合研究所の調査によれば、2012年の電子書籍・雑誌の市場規模はおよそ768億円、それが2014年には1390億円とほぼ倍増している。同調査の予測によると2018年には3000億円以上の市場規模になるという。

しかし、公益社団法人全国出版協会の発表によれば、2014年の出版市場の規模は約1兆6000億円である。1996年から1兆円近く減少しているが、それでも電子書籍市場の10倍を超えている。これでは、まだ「紙の本が消えてしまう」とまではいえないのではないか。

だが、電子書籍が普及しないかという話ではない。むしろ電子書籍が大きく普及する環境は整ってきている。スマートフォンの大画面化は、専用の電子書籍リーダーやタブレットを使うことなく、電子書籍を楽しめる環境を提供している。こうした変化の中、ユーザーの読書環境はどのように変化しているのだろうか。

本研究では、ユーザーが、紙の本と電子書籍をそれぞれどう捉えているのか、両者をどう評価しているのかをインタビューによって調査したい。

第二節 電子書籍とアプリケーション

ここでは、いくつかの代表的な電子書籍リーダー、またはアプリケーションについて紹介する。

大手の電子書籍アプリ、端末として、Amazon Kindle がある。Kindle 本をアプリにダウンロードするには、インターネットに接続する必要がある。Safari ブラウザから Kindle ストアを開く。Kindle 無料アプリと同じ Amazon アカウントで Kindle ストアにサインインし、読みたい Kindle 本をタップすると、商品詳細ページが表示される。本を購入するには、「1-Click で今すぐ購入」をタップし、本を読むには、「今すぐ読む」をタップする。コンテンツは購入後、Kindle for iOS に配信され、コンテンツは最大 3 つまで同時にダウンロードすることができる。

Kindle ストアに販売されている本ならば最初の数ページを無料でダウンロードすることが出来る。気になる本はサンプルと目次を確認することである程度の内容を把握でき、購入の際の手助けとなる。

また、購入した電子書籍については、万が一データが消えてしまった場合でも、再度ダウンロードすることが可能である。ただし、ストアから書籍自体がなくなっている場合はダウンロードはできない。

Kindle は、読書中に気になった部分をハイライトすることができ、それを一括で表示することが出来る。作業の際に本の内容を引用したり、SNS 等でシェアすることもできる。また、ポピュラーハイライトという他のユーザーがハイライトした人気の部分を知ることが出来る機能もある。同じ本を読んだ人はどこが印象に残ったのか、どこを重要だと感じたのかを知ることが出来る。

また、画面の上端をタップしてメニューを開くことでしおりボタンが表示される。しおりは複数のページにつけることが可能で、メニューのしおりボタンを押すことでしおりを付けた一覧を表示することができる。一覧をタップすることでそのページを表示したり、そのページにジャンプすることが出来る。また、しおりは削除することもできる。

本の中で探したいフレーズ、単語のみを検索することが出来る。固有名詞や特定の単語を検索することで知りたい情報の部分のみ読む、ということもできる。わからない単語を長押しし、辞書機能を使うことですぐに調べることもでき、読書中に調べた単語は単語帳に追加され、メニューからアクセスすることができる。

紙の本の場合、文字が小さくてもそのまま読むしかないが、kindle では文字を好みのサイズにすることが出来るため、老眼の人でも眼鏡なしで読むことが出来る。また、フォントも変更することが出来、読みやすい文字を選ぶことが出来る。

2016 年に発売された「kindle paperwhite 32G, マンガモデル, Wi-Fi」に連続ページターンという機能が追加され、ページを高速でパラパラとめくることが出来るようになっている。

無料マンガ閲覧アプリも、近年では増加し、無料で読めるという手軽さから利用者も多い。

ここでは、無料アプリの一例として、comico を紹介する。マンガアプリである comico は、無料、縦読み、オリジナル漫画を連載（comico でしか連載されていない）という特徴を持っている。また、会員登録も必要なく、アプリをインストールするだけで連載されているマンガを読むことができる。

通信環境が悪い状態でも漫画を読むことができる「ダウンロード」という機能がある。これはスマートフォン内に作品を保存することができ、読み込みの長さに悩む必要がなくなる。ただし、保存できるのは 30 話分までで、48 時間後には消去されるので、あくまで一時的な保存機能になっている。ダウンロードした作品は、トップページの「その他」ページの「ダウンロード一覧」から読むことができる。

会員登録をすると本棚機能が使えるようになり、お気に入り登録した作品をアプリ内の本棚にストックすることができる。（会員登録は無料で、メールアドレスまたは Twitter、Facebook のアカウントで登録することができる）

また、会員登録の他に、課金要素も存在し、課金を行うことで一週間早く連載漫画の新しいエピソードを読むことが可能になり、スマートフォン内に永久的に保存を行うことができるという実質的な書籍の購入のようなシステムも存在する。

アプリ内の作品はランキング表示を行うことで、現在人気な作品をすぐに把握することができる。また人気の高い作品は、書籍として販売される場合もあり、その際は縦読みではなく、ページを開く書籍の形式に合わせて再編集され、あとがきや、表紙も追加される。（例として ReLIFE が挙げられる）

その他にも、端末内にあらかじめプリインストールされているアプリもある。その一例が iBooks である。このアプリは iPhone にプリインストールされている。

iBooks で購入するにはまずインターネットに接続する必要がある。また、AppleID が必要。購入については、iTunesStore からでも可能。支払いにはクレジットカード以外にも、iTunesCard でも支払いが可能である。気になった書籍については、サンプルをダウンロードすることができ、50 ページ程読むことができる。

購入した電子書籍については、万が一データが消えてしまった場合でも、再度ダウンロードすることが可能である。ただし、ストアから書籍自体がなくなっている場合はダウンロードはできない。

iBooks の機能として、辞書機能がある。わからないと思った単語を長押しすることで辞書機能呼び出すことができる。

また、辞書機能以外にも、文節にラインを引くことができたり、しおりを付けることができるハイライト機能、メモを残す機能がある。他にも該当箇所を長押しすることでコピ

一したり、その箇所をメール/メッセージ、Twitter、Facebook で送信することが可能である。

Kindle 同様、画面の輝度、フォント、文字のサイズを自分好みに変更することもできる。以上のように、様々な電子書籍端末、アプリが存在し、タイプも異なる。

第二章 先行研究

第一節 紙の本の物質性

粉川(2014)は、本とは必ずしも読むためだけのものではなく、本棚の上に長期間置かれ、その背表紙が眺められる存在でもあるとしている。しかし、今の電子本は、本のこうした物的側面を捨てて、別のもので代替しようとしている。本が知や情報のカプセルのように見なされ、情報の量という観点から、電子的なメモリー装置と比較されたりするが、それは、本の物質的な側面をなおざりにしているのではないかと述べている。本には、それが内蔵している情報以上に、その物的な外部に直接的(表紙の手あかやシミ)あるいは間接的(思い出や記憶)に付着させられているものがあるからである。したがって本が持つ物質性を現在のビデオやコンピュータが持つことはできないと考えている。

桂川(2010)は、装丁という仕事は、テキストに身体性(物質性)を与える作業と考えている。電子ブックの普及により、「テキストの物質化」という過程が消失し、アップデートなどによって一方的にテキストが上書きされて、「版」という概念がなくなってしまうのではないかと述べている。書籍の電子化は、「コンテンツさえあればいい、それ以外は不要」という発想であるが、読書は本当にコンテンツを受容するだけの行為なのか。読書という行為は、視覚的にテキストを追うだけでなく、身体的なコンテキスト(状況、文脈、背景)を読み込み、「自己編集」している。「電子ブックを読んでみたが、文章が頭に入らない」という声を聞くのは、電子ブックはコンテキストが作りにくいからであるとし、電子ブックが人間の身体や生理に本当になじむのかどうか疑問であると桂川は述べている。

また、前川(2010)は、紙の本の物質性について、「めくる」という行為を例に挙げている。「めくる」という行為が持つテキストの空間的な把握や、書き込みや折り曲げが可能であるといったアナログな拡張性は、現段階の電子メディアおよびその再生装置では完全に再現することはできない。また、一枚のディスプレイ上にいくらかでも文字情報を書き換えることができるという可変表示装置を必須とする以上、そこに空間性やアナログな物質性は疑似的にしか付与できず、紙の本が持つインターフェースは置換できない特性を書籍に与えている。しかし、主体が「めくらない世代」へと順次置き換えられれば現状のインターフェースの優位性を失ってしまうのも事実であると述べている。

「めくる」ことについてはクレイグ(2014)も、ページをめくることのiPhoneでの再現は、すでに退屈で、そうすることを強制されるように感じると述べている。

以上の先行研究は、いずれも紙の本だからこそその物質性を重要視している。けれども、多少の疑問も残る。粉川(2014)は、紙の本にはその情報以上に、手あかやシミ、思い出や記憶が付着させられていると述べていたが、普段使っている電子端末にだって愛着や、思い出はあるのではないだろうか。また、電子版では、文章が頭に入らないと言われていたが、果たして漫画などでもそれは同じなのだろうか。

第二節 電子書籍の物質性

電子書籍は本当に物質性を持たないのだろうか。玉川(2015)は、スマートフォンや kindle のような端末の物質性は健在で、紙でも端末でも手にもってテキストを目で追うのは共通していることから、その体験が同一であるかは別としても、電子書籍は物質性を有していると述べている。紙の本では、コンテンツと媒体の物質性が統合しているため、書物の受容者はその物質性に対し自由度が低い。テレビや CD では受容者は再生機等を選んで受容することができるが、紙の本にはそれがない。だから装丁という作業が重要視されている。しかし電子書籍では、テレビなどと同じく、形のない媒体で配信され、再生機も選べ、ディスプレイや文字の大きさなどもユーザーが選択可能になる。つまり、コンテンツに縛られていた物質性が、受容者側で制御可能になる。この状況を指して、電子書籍が非物質的であると言われているのではないかと、と今までの主張に対し批判的な見解を示している。

また、漫画は電子化により大きな影響を受けており、新たな漫画形式として縦スクロール式の漫画が登場している。(その一例として、comico を挙げている)この事例のように、ページにかわるスクロールという変化は、読書行為における身体性や端末の物質性を反映した上でコンテンツに大きな変化をもたらす、と述べている。紙の本に物質性があるからと言って、電子書籍には無いのではなく、また別の物質性があるのだと玉川は考えている。

以上のことから、物質性というのは、紙の本だけではなく、もっと複雑であるということが分かった。本論では、大学生の読書行為において、物質性がどのようにかかわっているのかに着眼したい。

第三章 調査

第一節 調査概要

紙の本と電子書籍に対する意識調査を行うため、大学生 5 人に対しインタビュー調査を実施した。なお、インタビュイーたちは全員一人暮らしである。

以下がその内容をまとめたものである。

第二節 それぞれの電子書籍体験

第一項 電子書籍で活字は気に入らない A さんの場合

インタビューは2014年11月30日で、当時21歳(男性)。漫画を読む際に電子書籍を利用している。大学二年生の時にiPadを購入し、電子書籍での読書量は一日30分以上、紙の本は週一時間程度。(雑誌など)主に無料アプリのコミックなどを利用している。また、同人作品の電子版を購入することもある。

特に読みたいものがなくて、暇つぶしなどには電子書籍を、何回も読みたい物や知識として吸収したいものは紙の本で何度も読むようにしている。

基本的に特に読みたいものがなくて暇つぶしとかだったら、まあ電子書籍でいいかなと思っているんですけど、何回も読みたかったり、実際に知識を吸収したいのがあったら紙の本で何回も愛読するっていうようにしています。

と、紙の本が繰り返し読むことと相性が良いと感じている。電子書籍でも何回も読めることは理解しているが、「そうですね、「読んだ」っていうのが欲しいですし、あるとうれしいかなって(だから本棚においておきたい)。

電子書籍で知って、気に入ったものは紙の本で買うことがある。しかし、ずっと持っておきたいとか大きな愛着が紙の本に対してあるかという点、そういうわけでもなく、実際スペース確保のため知人に漫画を譲っている。

電子書籍のメリットとして、薄い端末一枚で本棚ごとの容量、文章量が持てる、という点を挙げている。そして、不便だと思う点として、電子書籍だと読書後の達成感や充実感を感じづらいということを述べている。

まあ、読書した後はたいてい読んだ後に達成感とか充実感があると思うんですけど、電子書籍だとあまりそれは感じないので、漫画だと良いんですけど、活字で読む場合はちょっと気に入らない点ですね。

Amazonなどで、紙の本が700円、データだと500円とかで売られているのを見ても、自分がなぜ電子側を選ばないのかがよくわかっていない。「自分がどうしてデータのほうを選ばないっていうのはあんまりよくわからないんですけど、何となく本にまだ愛着があるのかなっていう風に今のところ感じています」。

第二項 電子コンテンツへの先入観 Bさんの場合

インタビューは2014年11月30日で、当時21歳(男性)。以前は電子書籍で漫画を読んでいたが、現在はほぼ利用していない。大学二年生の時にiPadを購入し、現在は調べものやゲーム、SNSが主な用途になっている。無料アプリのコミックを利用していたが、利用頻度は月に数時間程度で、当初からそこまで多くはなかった。

新聞などは、電子端末で読むほうが楽だと思っているし、漫画も電子書籍で読むのはアリだと考えている。小説などは、悪くはないとは思っているが、手で持って読みたいと思っている。「漫画とかもまあ電子書籍のほうが楽だと思うんですけど、小説に至っては、(悪くはないが)自分は手で持って読みたいっていうのがあるので」。

「本物」で持つておきたいというのと、何度も読み返すにあたって、ページをめくって読みたいという思いがある。また、紙の本を、本棚に飾るインテリアとしてとらえている部分もある。「やっぱり、本物で持つておきたくて、あと、自分は結構読み返すので、それはやっぱりページをめくって読みたいっていうのがあるので」。

電子書籍の良い点として、いつでもどこでも読める、というのを挙げている。そういう部分は、かなり気軽でいいと述べている。「ベッドの中で見るということが出来るので、まあ本棚から手に取るっていうのとかよりはもう、全然気軽さが変わるっていう感じですね」と、電子端末特有のメリットについて触れていた。

逆に良くないと思う点については、そもそもネット環境下でダウンロードしないといけないこと自体が不便に感じている。(iPadがネット環境下にあるということは、基本家にいる時になるため結果として本棚に手を伸ばしてしまう) また、電子端末でできること、やりたいことが多いせいで自然と端末を開いているときに書籍を読むという選択肢が小さくなっていってしまうと述べていた。

また、データに対して、「所詮はデータだから」という先入観が少なからずある。

基本的には、大切なものはやっぱり本で、手元においておきたいって思っていて、その一、電子書籍は所詮データだから、データが破損したら見れなくなるっていう、偏見というか、(そういう)考えがあるので...

と、電子コンテンツは自分の制御化にはないんだというイメージを持っている。

第三項 電子書籍は選択肢に無い Cさんの場合

インタビューは2014年11月30日で、当時20歳(女性)。電子端末で新聞を読んでいるが、漫画や小説などに関しては、紙の本のほうが好きなため、機会があっても電子書籍に手を出すことは今のところないと考えている。本棚に自分の好きな本や作家の本が並んでいると気持ちがよいと感じている。

うーん、私は漫画とか小説を読むってなったら、紙の本のほうが好きなので、電子書籍ではあんまり読まないと思います。好きな作家の本は作家買いとかするので、それを本棚に並べて、見るのは良いですね。

紙の本を、ページをめくっていることが、自分の中ですごく読書をしている感じや、知識を得たなという実感が持てるかと考えている。「紙の本を、ページをめくっているのが、すごく、読んだなっていう、自分の中でその、知識を得たなっていう気分になるので」。

漫画や小説を買う頻度が高いため、収納に困ることもあるが、それでも電子書籍という選択肢が出てこないという。

漫画、小説合わせて月に10冊(購入する)かな？

(鎌野：収納スペースに余裕はありますか?) 読み終わった本は、実家に送ったりしています。今のところ収納に困らない電子端末とか選択肢は出てこないですね。

電子端末で新聞を読んでいるため、いつでもどこでも読めるというメリットは感じている。しかし、回線が遅いと、ダウンロードに時間がかかり、なかなか文章が読めないこともあるので、そこは不便に感じている。「ネット回線が遅いとすごく時間がかかって、やっぱりイライラしたりもするので、それが一番アレかなと思います」。

電子書籍と紙の本で、内容は同じかもしれないが、「なんか違う気がする」と述べている。昔から、ずっと紙で本を読んでいた、習慣化しているため、今更移行することもないだろうと考えている。

まあ(電子版のほうが安くても)私はたぶん紙の方を買うと思います。習慣から来ているのかわからないですけど、ずっと高校生時代とかも紙の本で漫画や小説を読んでいた、そのままの習慣でずっと紙でっていうふうになってますね。

第四項 電子版では読書の達成感がない Dさんの場合

インタビューは2014年12月7日で、当時20歳(女性)。漫画を読むために電子書籍を利用している。わざわざ買って、自分の部屋に置くまでもないかなと思うものは電子書籍を利用している。電子書籍で購入すると、お金を払っているという感覚が薄れると考えているらしく、あまり使いすぎないようにしている。(形ないものにお金を出すことに若干の抵抗感がある)

えっと、わざわざ買って、自分の部屋の本棚に置くほどでもないかなって思うものは結構電子書籍に頼っていますね。あとは近くに本屋がないので、すぐには買えるっていうのは良いですね。でも、お金を払うっていう感覚が薄れるので、あまり多くは使わないようにしています。だから使用頻度はそこまで高くはないです。

複数巻でている本で、ここの巻だけ読みたい、と思ったときに、その巻だけ本棚にあるのが見栄えが悪い、気持ち悪いと感じるのでそういうときも電子版を買っている。

ええと、例えば、いっぱい巻数が出ている漫画で、ここだけ読みたいっていうときがあるんですよ、その、ここの部分だけ読みたい、とか。それで、その巻だけ持っているのってなんだか嫌じゃないですか。30巻まであるのに15巻だけが本棚にあるのって。そういう時に電子書籍って便利ですよ。なんか本棚の見栄えが悪くなるというか、気持ち悪いというか。

他のインタビュー同様、いつでも(その本を持ち歩かなくても)どこでも買って読めるのは便利だと思っている。しかし、ダウンロードが少し面倒くさいと思っている。

最初は買うことに抵抗感があったが買って読むと続きが気になってまた買ったりするため、なんだかんだで慣れては来ていると述べている。しかし活字に関してはやはり抵抗感はあるようで、紙の本のほうが読んだ時の達成感はあると思っている。小説や本を並べて、「ああ、これだけ読んだんだな」とわかるほうが良いと思っており、本としての物理的な形がないことが原因なのかなと述べている。

やっぱり、漫画は慣れたんですが活字はまだ抵抗があります、電子書籍で読むのに。小説とかその他活字の本とかは読んだやつを並べて、ああこんなに読んだんだなってわかると嬉しいというか。

(鎌野：達成感が電子書籍に無い理由は?) やっぱり、形がないっていうのがありますかね。お手軽さはあるけど、その分、こんなに薄い(端末)のに全部入っているのが大丈夫かなって。

第五項 電子漫画と小説の差 Eさんの場合

インタビューは2017年11月29日で、当時19歳（男性）。漫画を読む際に、電子書籍を利用している。端末は android を使用しており、無料漫画閲覧アプリである comico と GANMA を利用している。また、comico に関してはリリース当初から利用している。一日当たり、30分以上は電子漫画を読んでいて、紙の本で小説を二ヶ月に一冊程度読んでいる。

電子書籍と紙の本の使い分けとして、漫画と小説で分かれており、文字が多いものに関しては紙でめくって読まないといまだに違和感がある。

慣れの問題かはわからないですけど、中高の時は週一で一冊くらいのペースで小説を読んでいたんで、やっぱりこう、紙でめくらないと違和感があるんですよね。スワイプしたらページがめくれるモーションがあったりしても、紙の感覚と小説の厚さがないと、うーん違和感が。

この違和感は、漫画では、

漫画だと、文字というよりは絵じゃないですか。(鎌野：うんうん。)自分の中で絵って、デジタルで見ようが紙で見ようがあまり変わりはない。むしろデジタルのほうがアニメとか映画に近い感覚があったんで、多分そういうのがあって見やすいんじゃないかなって。

と、気になってはいない様子である。しかし、電子書籍のデメリットとして、紙の感じがしないということを挙げており、全面的に肯定しているというわけでもない。また、アプリを利用する際に表示される広告を邪魔だと感じることが多い。

紙の本で小説を読むのには、違和感以外にも、達成感が絡んでいる。

やっぱり紙のほうが目で見てわかるから、ページ数とか。電子で最後まで読んで300ページってなったとしても、結局その端末の厚さで終わるじゃないですか。やっぱり300ページの小説を読んだらその分の厚さがダイレクトに伝わる紙のほうが達成感があるんじゃないかなって。

電子書籍のメリットについては、手軽さを挙げている。特に、読みながらでもその端末で別のことができることは、電子でしかできないこととして肯定的に捉えている。「例えばラインとか SNS の通知があったときに、紙の本だといちいち取り出す必要があるけど、電子なら読みながらすぐ他のアプリが開けるので便利ですね」。

comico で書籍化された漫画でも、自分が気に入っていた漫画であれば購入している。そ

の際の、イラストの修正、コマ割りの変化、表紙、あとがきや作者の書下ろしイラストなどを楽しみにしている。「*comico* の場合だと、縦読みが書籍になるわけじゃないですか、それがどう変わるのか楽しみです。あとは書下ろしとかもあるのでファンとして買わねばっという感じです」。

第四章 分析

インタビュー調査の結果から、紙の本と電子書籍、そのどちらにもそれぞれ特有のもの、つまりは物質性を感じていることが分かった。ここでは電子書籍と紙の本、それぞれの利点を、インタヴューたちの語りからまとめていきたいと思う。

第一節 インタヴューたちが語った電子書籍の利点

以下は、電子書籍の利点について語られた部分である。

Aさん

一番良いと思う点は、まあ、薄いiPad一枚に本棚ごとの容量が持てるっていう点が一番良いかなって思ってます。

Bさん

自分は気軽に見れる点、ですかねえ。(端末は)基本手元にあるものなので、いつでも見ることができるっていうのがあって。あとはベッドの中で見ることができるので、まあ本棚から手に取るっていうのよりはもう全然気軽さが変わるって感じですね。

Cさん

端末で見る利点…一番はいつでもどこでも見れるっていう点ですね。それが目的で(端末で新聞を)利用しているので。

Dさん

やっぱり、いつでも読めるっていうところですかね。本とか持っていくわけにもいかないし、暇な時に、買った本を読めるのは良いと思います。

Eさん

あー、やっぱり手軽なところですよ。小説を紙で読みたいと思ったら、スマホ置いて、物を持たないといけないじゃないですか。電子書籍だと、スマホの中に入っているんで、SNS、ライン、ツイッターをして、そのついでに暇になったら読むとか。あとは例えば電車の待ち時間とかにスマホ持ったままパッとアプリ開いて読むっていう手軽さがやっぱり便利だなと思います。(鎌野：読んでる最中に通知とか来てもすぐ開けるね。)
そうなんです、紙の本だと閉じるなり葉はさむなりしてスマホを手に入る手間があるんで。

以上のように、Aさんは、端末一つで大量の書籍を持つことができる点、Bさんの場合、ベッドの中で寝ながら読むことができるような気軽さを評価している。Cさん、Dさんは、いつでもどこでも読むことができるという点、EさんはラインやSNSなどの傍らに読むことができ、アプリ間の移行がスムーズな点や、紙の本にはない手軽さを挙げている。

いずれも、電子端末の機能面、紙の本にはない要素を利点として挙げていた。

第二節 インタビューたちが語った紙の本の利点、電子書籍のデメリット

紙の本に関しては、しばしば感覚的で、漠然としているものの、以下の四点が主に好まれていることが分かった。

- ① 過去の読書履歴が確認できる(知識を得たという感覚、達成感)
- ② 繰り返し読むこと
- ③ ページをめくるといった動作
- ④ 本、ページの厚さの感覚

以上のように、紙の感覚や、どれだけ読んだかが見てわかる、というところに紙の本としての魅力を感じていることが分かる。

以下はインタビューたちの語りである。

Aさん

何回も読みたいものや、知識として吸収したいものがあつたら紙の本で何回も愛読するっていうようにしています。

「読んだ」ってというのが欲しいですし、あるとうれしいかなって。(だから本棚に置いておきたい)

Bさん

自分は結構読み返すので、それはやっぱりページをめくって読みたいってというのがあるので。

漫画とかもまあ、電子書籍のほうが楽だとは思んですけど、小説に至っては、自分は手で持って読みたいってというのがあるので。

Cさん

紙の本を、ページをめくっているのが、すごく、読んだなっていう、自分の中でその、知識を得たなっていう気分になるので。

好きな作家の本は作家買いとかするので、それを本棚に並べて、見るのは良いですね。

Dさん

小説とかその他活字の本とかは読んだやつを並べて、ああこんなに読んだんだなってわかると嬉しいというか。

Eさん

やっぱりこう、紙でめくらないと違和感があるんですね。スワイプしたらページがめくれるモーションがあったりしても、紙の感覚と小説の厚さがないと、うーん違和感が。

この、紙の本で読みたいという欲求は、小説などの活字の本で表れていた。これには、電子書籍では読書後の達成感が得られないから、という語りが見られた。

Aさん

まあ、読書した後はたいてい読んだ後に達成感とか充実感があると思うんですけど、電子書籍だとあまりそれは感じないので、漫画だと良いんですけど、活字で読む場合はちょっと気に入らない点ですね。

Dさん

やっぱり、漫画は慣れたんですが活字はまだ抵抗があります、電子書籍で読むのに。小説とかその他活字の本とかは読んだやつを並べて、ああこんなに読んだんだなってわかると嬉しいというか。

(鎌野：達成感が電子書籍に無い理由は?) やっぱり、形がないっていうのがありますかね。

Eさん

やっぱり紙のほうが目で見てわかるから、ページ数とか。電子で最後まで読んで300ページってなったとしても、結局その端末の厚さで終わるじゃないですか。やっぱり300ページの小説を読んだらその分の厚さがダイレクトに伝わる紙のほうが達成感があるんじゃないかなって。

電子書籍で活字を読んだ際に、達成感がないということについては、過去の読書履歴が視覚的にわからないということが原因にあると考えられる。読み終わったものを本棚にストックしていくことで、自分が知識として得たものなどが、紙の本と比べ、分かりづらいついて考えている。

以上のインタビューたちの語りについて、以下のように考えることができる。

- ①繰り返し読むことが「読んだ」という感覚、つまりは知識として定着した感覚を生みやすいだろう。
- ②ページをめくって読むということが自分がどれだけ読んだかを把握することができ、読書の記憶として触覚的に残る、知識を得た感覚を得ることができるだろう。
- ③本の厚みを感じることで、自分がどれだけ読んだかを視覚的にも触覚的にも確認でき、達成感を得ることができるだろう。

このように、冒頭で述べた繰り返し読むこと、ページをめくる動作、本の厚みという三つの利点が、過去の読書履歴の確認（知識を得る感覚、達成感）へとつながる要素であることが分かる。

以上のことから、紙の本に対して、インタヴューたちは達成感を期待しているということが分かった。他方で、Aさんが「漫画だといいいんですけど」と述べているように、この「読み終わった達成感」というものは、漫画では特に重要視されていない。これらはすべて小説やその他の活字の本でのみ語られている。

ではなぜ、小説やその他活字の本では達成感が重要視され、漫画では重要視されなかったのだろうか。それには次に挙げる漫画のふたつの性質が関わっているかもしれない。

ひとつに、漫画が基本的には連載物であり、最終話が告知されない限り終わることがないことから、あるエピソード、またはある単行本を読み終えたとしても、「読み終わった」という達成感よりも「読み終わってしまったから早く続きが読みたい」という気持ちのほうが勝ってくるのではないか。

こうした読書習慣を当たり前のこととして積み重ねていることが、達成感を悟りにくくしている可能性が考えられる。

もうひとつは、漫画は「読む」というよりも「見る」という感覚が勝っていること。以下は、漫画と他のメディアの関連性についてEさんが語った部分である。

Eさん

漫画だと、文字というよりは絵じゃないですか。(鎌野：うんうん。)自分の中で絵って、デジタルで見ようが紙で見ようがあまり変わりなくて。むしろデジタルのほうがアニメとか映画に近い感覚があったんで、多分そういうのがあって見やすいんじゃないかなって。

漫画というコンテンツは、他のメディアとの関わり、連動性が非常に強いと言える。漫画がアニメ化されたり、映画化、実写ドラマ化されるのなどがその例であろう。またその逆で、映像作品がコミカライズされることもある。漫画を読むきっかけとなったのがアニメやドラマ、映画であったりする場合もある。このように漫画は映像作品との親和性が高く、Eさんのような感覚で、すなわち「読む」のではなく「見る」ような感覚で漫画を消費するというのが習慣となることも十分に考えられる。このような感覚が基になって「本を読む」ことで得られる達成感が「漫画を見る」ことには結びつけられにくくなる可能性があるのではないか。

ただし、Cさんは例外である。Cさんは、電子書籍の利便性を理解しつつも漫画だとしても紙の本で読みたいと考えている。漫画は達成感が重要視されないため、電子書籍との相性が良いとは言いつつも、必ずしもそうだとは言いきれない。

Cさん

まあ（電子版のほうが安くても）私はたぶん紙の方を買うと思います。習慣から来ているのかわからないですけど、ずっと高校生時代とかも紙の本で漫画や小説を読んでいたのので、そのままの習慣でずっと紙でってなってますね。

漫画、小説合わせて月に10冊（購入する）かな？

（鎌野：収納スペースに余裕はありますか？）読み終わった本は、実家に送ったりしています。今のところ収納に困らない電子端末とか選択肢は出てこないですね。

このように、収納スペースの余裕が下宿先にはあまりないにもかかわらず、電子書籍で読む選択肢がない。Cさんは、自分の好きな作家に関しては作家買い(自分の好きな作家が出している本であれば内容に問わず購入する)をしたり、表紙買い(表紙だけで購入判断する)しているため、本屋に赴き、思わぬ発見や、予想外の出費などを楽しんでいる節がある。そういった購買行動は、たとえ漫画であっても、電子書籍との相性が良くないのではないだろうか。

紙の本へのこだわりについては、さらにいくつか指摘できる。まず、ある人々においては、高校時代からずっと紙の本で購入し続けていたので、紙の本で購入することが習慣化されている。例えば、Eさんは高校時代は紙の本で小説を一週間に一冊のペースで読む習慣があり、今までの購買・読書習慣をいまさら変えることに対して抵抗があるとも考えられる。

また、書籍は、電子版が発売される場合、若干のタイムラグが生じる場合がある。そもそも電子版が出ない、という場合もあるため、Cさんのような新刊の発売日に購入したり、本屋へ頻繁に赴くことが多い「本好き」には、これもまた、電子書籍との相性が良くないと言える。

最後に付け加えたいのは、「データそのものへの不信感」である。これはBさんが電子書籍のデメリットとして語ったものである。

Bさん

基本的には、大切なものはやっぱり本で、手元においておきたいって思っていて、その一、電子書籍は所詮データだから、データが破損したら見れなくなるっていう、偏見というか、(そういう)考えがあるので...

このように端末そのものは制御可能でも、コンテンツはそうではない、と考えている。実際のところ、電子書籍の場合はデータが破損してしまった際は、第一章第二節で触れたように、もう一度ダウンロードし直すことで、再び書籍を読むことが可能である。

しかし、回収騒動など、所持していたデータが閲覧できなくなり、再ダウンロードする

ことができなくなる、といった事態も発生することがある。実際、Amazon プライムで閲覧することができた某アニメ作品が、声優の不祥事によって回収騒動となり、閲覧ができなくなった、という事例も存在するため、書籍でも同じことが発生しないとは言い切ることができない。

コンテンツが手元にないということが、データへの不信感を招き、結果として電子書籍に対して、警戒心のようなものを抱いてしまう、ということも考えられる。

第五章 考察

今回インタビュー調査を実施した大学生 5 人は、玉川(2015)が紙の本、電子書籍のそれぞれに別の形の物質性が存在すると述べていたように、紙の本と電子書籍、それぞれの物質性を感じていた。そして、インタヴューたちそれぞれ機能面や手軽さ等を電子書籍特有のものと捉え、評価している。以上のことから、玉川(2015)の論は説得力を持つものであるとはいえる。しかし、それでもやはり、電子書籍は、達成感に結びつく視覚的・触覚的要素を欠いている、とインタヴューたちの語りからも判断せざるを得ない。

大学生である、という立場からも、まだ本をストックする段階であると言える。また、一人暮らしである、といっても C さんのように本を実家に送るなど、実家との繋がりも強いいため、スペース等に関係なく、視覚的・触覚的物質性を持った紙の本は電子書籍よりも優位に感じるのではないか。

視覚や触覚に関わる「ページをめくる」や「繰り返し読む」、「読み返す」といった行為は、前川(2010)で述べられていたテキストの空間的な把握との関係が深いと考えられる。本を手を持ち、持っていたページ分の厚みである程度把握する、または厚みを視覚的に把握しておくことで、もう一度読みたいページへ戻ってみるなどの行為が電子書籍と比べ、紙の本の方が相性が良く、感覚的で、容易である。そのため、繰り返し読みたいと思っている活字本に関しては、紙の本で読むほうがページ数を覚えていない時などにストレスを感じにくいのではないだろうか。E さんが述べているような、「小説に厚みがないと違和感がある」というのも、本の厚みを触覚や視覚で把握することができないことから生じているのではないだろうか。

ただし、漫画のような達成感が重要視されないジャンルは、電子端末の機能面、物質性に合わせ、コンテンツそのものを変化させていくことでユーザーに受け入れられていくのではないだろうか。実際に、電子端末に合わせてつくられた「縦スクロール」の漫画は、comico ユーザーである E さんから高い評価を受けており、電子書籍との相性が良かったと言える。こういったコンテンツの変化は漫画というジャンルにおける電子書籍の普及の後押しになることが期待できるのではないだろうか。

また、電子書籍の普及の障害となっている背景には、C さんが語った「習慣化された購買行動」や、B さんが語った「データへのイメージ」などもかかわっている可能性がある。スマートフォンなどの電子端末が世の中に普及し、電子書籍に触れ合う機会が大幅に増加した今、こうした読者側のスタンスが徐々に変化していくことで、本稿で見るよりは電子書籍が普及していくのかもしれない。

〈参考文献・URL〉

- ・インプレス総合研究所, 2017, <https://r.impressrd.jp/iil/>
- ・桂川潤, 2010, 『本は物である 装丁という仕事』 せりか書房
- ・グレイブ・モド, 2014, 『僕らの時代の本』 ボイジャー
- ・粉川哲夫, 2014, 『メディアの臨界 紙と電子のはざままで』 せりか書房
- ・全国出版協会（公益社団法人）, 2017, <http://www.aipea.or.jp/>
- ・玉川博幸, 2015, 『出版における書物の物質性をめぐって』 『マスコミュニケーション研究 87』
- ・前田墨, 2010, 『紙の本が亡びるとき?』 青土社